

クローズアップ 研究者



鈴木源太郎
(すすむらげんたろう)

専門：農業経営学，農業構造論，
都市農村交流論

1972年，東京都生まれ。明治大学農学部農業経済学科卒業，東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻修了。博士（農学）。1998年農林水産省入省，農林水産政策研究所（旧農業総合研究所）に勤務。2008年より現職。

専門は，農業経営学，農業構造論，都市農村交流論。主著に，『現代農業経営者の経営者能力－わが国の認定農業者を対象として－（農林水産政策研究叢書第8号）』，農山漁村文化協会，2008年（平成21年度日本農業経営学会奨励賞受賞）がある。

Q 現在取り組んでいる主な研究テーマは？

A 農業構造問題や先進的農業者の経営問題に携わるかたわら，教育交流や農村ワーキングホリデーなど都市農村交流に関わる地域振興の課題にも幅広く取り組んでいます。

Q 具体的には，どのような研究ですか？

A 1つめの農業構造問題に関わる研究としては，5年ごとに公表される農業センサスの分析を中心として，農家以外の組織体が行う農業経営の実態を10年近く追っています。現在の農業構造は，ますます組織化・企業化する方向に進んでいるので，こうした主要な生産力担当層の動向は，2010年の農業センサスの中でも，しっかり押さえて行かなくてはならないと思っています。

2つめの農業経営に関する研究では，経営者能力論に取り組んでいます。農業経営者は，優れた栽培・飼養技術を必要とするばかりでなく，財務管理，労務管理，販売管理など，極めて多様なスキルを必要としており，また，経営改善の過程では高度なリーダーシップやモチベーションなどを求められています。農業経営者は，不断の努力を経て自らの経営者能力

を高めて行かなくてはならないわけですが，その前提として，農業経営者の能力把握をするための何らかの基準が必要です。私の研究は，その基準作りをするための第一歩として，農業経営者の能力をいくつかの要素に分解し，経営者の“資質”の問題に焦点を当てながら，経営成果との関係性などを明らかにしました。

一方，3つめの都市農村交流の研究としては，最近，教育交流の問題に精力的に取り組んでいます。このところ，教育交流の世界では，修学旅行に農山漁村体験を組み込んだり，小中学校などでは教科学習の一環として農山漁村体験を位置づける動きが大変活発になってきています。従って，現在は，受入側である農村の地域活性化効果について分析するとともに，文部科学省などと連携協力しながら，教育効果の高い農山漁村の受入システムのあり方についても分析を進めているところです。

また，農村ワーキングホリデーに関する研究ですが，これについても先進地で取組が始まった頃から10年近く調査等を続けています。幅広い年齢層の参加者が生き活きと農作業を楽しみながら，受入農家の農作業の実質的な役に立っているこの仕組みは，農村振興を考える上で重要な取組と考えています。農村ワーキングホリデーの最新動向については，

先月（2010年6月）新刊の『農村ワーキングホリデー・ガイドー人と農を結びありのままの農家体験ー』（家の光協会）をご覧ください。幸いです。

Q 経営研究と農村地域研究，どちらに軸足を置こうとお考えですか？

A これまで，農業の先進的農業者の経営問題と地域振興の問題を並行的に扱ってきましたが，両面を扱わざるを得ないことに，以前は戸惑いも感じていました。しかし，今では，研究の視野を広げるという意味で大変良い面もあったと考えています。現場の農村にとっては，農業で中心的な役割を担うトッパンナーとしての経営と，それを取り巻く地域の問題が，常に表裏一体の関係にあるからです。研究のスタンスとしては，今後も当面は両にらみで進めて行くことになりそうです。

Q 今後の抱負

A 農業・農村の動きを適時に捉えていくためには，現地の動きをしっかりと確かめていく必要があります。今後とも，現場主義に徹し，楽しみながら“脚で稼ぐ研究”を進めていければと考えています。